

第2 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

平成26年度の試験は、大学入試センター（以下「センター試験」という。）「中国語」としては18回目に当たる。

「中国語」問題作成部会は、以下の原則に基づき試験問題を作成した。

- (1) 前年度までと同様に、「中国語」における平成6年度新教育課程試験問題調査委員会研究部会及び平成7年度問題作成部会の検討内容・方針を基本的に遵守する。かつ、平成21年度センター試験中国語検討委員会の最終報告を参考としつつ、平成9年度から平成25年度までの試験に準拠する。
- (2) 高等学校教科担当教員からの平成26年度試験に対する意見・評価を尊重する。
- (3) 受験者の平均点について、他の外国語筆記科目との著しい不均衡が生じないように努力する。
具体的な問題作成の方針は以下のとおりである。
 - (a) 高等学校学習指導要領（外国語編）に記載されている内容に準拠する。
 - (b) 高等学校における中国語教育の実態を踏まえて、出題の基準、範囲、内容を定める。
 - (c) 出題形式は「試験問題例」及び平成9年度から平成25年度の試験に基本的に準拠するが、既に17回の試験が行われているので、必要に応じて一部変更を加える。
 - (d) 高等学校における学習の成果が総合的・客観的に判定できる出題とする。
 - (e) 話し言葉に重点を置き、書き言葉に偏ることがないように配慮して出題する。

なお、高等学校における学習の成果をできる限り反映させるという観点、さらには、発音から有
意の文を組み立てる力を試すという観点からも、引き続いてピンイン表記（ローマ字表記）を重視
する方向で問題を作成した。

2 各問題の出題意図と解答結果

まず各問題の出題意図について述べ、次に具体的な問題と解答結果を取り上げる。また、必要に
応じて高等学校教科担当教員の意見にも触れることとする。

第1問 高等学校で学習していると思われる基本的な単語について、これを構成する、音節の三
つの要素（声母、韻母、声調）について問うものである。問題は全て中国語の発音面の基礎的
な力を問うものであるが、Cの問3で4音節の語の発音を問うところが前年度と異なる点で
ある。高校中国語教育レベルに即した日常単語が問われている良問との評価を得た。

A 声母の違いを問う問題である。2問とも良問であるとの評価を得た。

問1 “c-”と“z-”の違いを問う。③のみが“c-”、正答は③である。正答を含め、選択
肢は出現頻度の高いものである。平易な語彙の識別である。

問2 “g-”と“k-”の違いを見分ける力を問う。

B 韻母の違いを問う問題である。良問であるとの評価を得た。

問1 “-ai”と“-uai”の違いを問う。

問2 “-ang”と“-ing”の違いを問う。正答率は、問1より低かったものの、どの選択肢も

重要語であり良問との評価を得た。

- C 2音節、4音節の語について、声調の組合せが見出し語と同じものを選びその数を問う。五つの選択肢から選ぶ。該当する選択肢は一つとは限らないため、選択肢の単語の全てについてその声調の組合せを正しく知っていなければ正答が得られない。一般的に、声調の組合せまで含めて単語の発音を正確に習得するには、相応の学習時間が必要と思われる。

問1 見出し語は「第2声+第2声」の組合せであり、正解は①の「一つ」である。正答率が問2、問3に比べて低い問題であった。「结实」（丈夫である、第1声+轻声）の声調が難しかったと思われる。

問2 見出し語は「第2声+第3声」の組合せであり、正解は②の「二つ」である。他の単語の声調を確実に覚えておけば解ける問題である。高等学校教科担当教員からは、選択肢の単語が全て重要語であり、適切な良問である、との評価を得ている。

問3 今年度は昨年度の3音節の語を4音節の語に変えて出題した。1音節増えたが結果として正答率が特に下がったわけではない。高等学校教科担当教員から選択肢の語の第1音節、第2音節が全て同じ声調であったことについて出題に対する疑問が投げられたが、しかしこれは結果からの指摘であり、やはり全ての漢字の発音、声調を確実に覚えていなければ解けない問題であると考ええる。正答率は受験者の学力平均をほぼ反映していると思われる。

- D 見出し語の下線部と同じ発音を含むものを選びその数を答える問題である。五つの選択肢から選ぶ。漢字一字の発音（音節）を構成する声母、韻母、声調の三要素のそれぞれについて正確な理解が求められる。問1問2を通じて「よく練られた良問」との評価を得た。

問1 “复fù”と同音のものを含む単語を選択する。

問2 “取qǔ”と同音のものを含む単語を選択する。

問3 “数shù”と同音のものを含む単語を選択する。主として“shu”と“su”の違いを問う問題であるが、ネイティブ・スピーカーでも、出身地によっては混同することもあり、正答率が比較的低かった。

第2問 出題形式は様々であるが、いずれにおいても表現や語彙の面から学習到達度を見る問題である。

- A 今年度は前年度と同様、3項の対話の2項を補填する問題とし、会話文と選択肢をともにピンインで表記した。高等学校教科担当教員からは「前後の状況を把握させる素直な問題」とあるとの評価を得た。

B 類似した意味を持つ選択肢の中から正しいものを選ぶ問題。単独の語の用法や他の単語との結合関係を理解しているかを識別する問題である。正答率が比較的低かった。

C 文中の空欄に入れるのに「適当でないもの」を選ばせる問題である。いずれもやや難度の高い問題である。高等学校教科担当教員からは、高校中国語教育の中で高校生に文法や類義語のニュアンスの違いを理解させる困難さが指摘されたが、問題作成部会としては、より高い学習到達度を測る上では、こうした文法的理解や語のニュアンスの理解を深める学習は必須と考えており、学習範囲を逸脱するものでない以上、必要な出題と考えている。

第3問 和文中訳と中文和訳を通して、中国語で表現する能力と中国語の理解力を見ることを意

図した出題である。外部評価委員からは出題文の長さも適当であり、不必要に難解な日本語の慣用表現もなく、またピンイン重視の姿勢が見られることは好ましいとの評価を得た。

A 和文中訳を「並べ替え完成問題」形式で出題した。基礎的な文法規則を理解し、十分に把握しているかを問うもので、学習到達度を判定するのに重要な問題と考える。日本語に相当する意味の中国語文を作るために、八つの選択肢から必要な五つの語句を選び、かつそれらを正しく並べるのは、5年来の出題形式である。高等学校教科担当教員からは、日常の会話で、中国語テキストにも見られる基本的構文が使われており、良問であるとの評価を得ている。

問1 [21]に“一时”か“马上”を入れる問題であるが、「すぐには」という日本語が“一时”と対応することができれば解ける問題である。

問2 与えられた日本語に相当する中国語の文としては、“任何～都”の形式で動作の対象をとりたてた場合、助動詞“要”は動詞の直前におかれるのが一般的である。外部評価委員からは「中国語の前置詞構造を確認する良問」との評価を得た。

問3 この問いは、①「受け身文」の文構造が正確に理解されているか、②結果補語“住”の理解を問う問題である。外部評価委員からは「レベルが高い問題」との指摘をいただいたが、基礎的な文法知識から外れるものではないと思われる。

問4 “(座ると)長くなる”という表現が“就不走”(座ってしまうとなかなか去らない)と通常表現されるように、日本語と中国語で表現の発想が異なるものについて理解しているかを問う出題である。

B 和文中訳の問題である。選択肢の中国語はピンインで表記してある。問1、問2ともに「日本語も素直」で「概ね素直な良問」との評価を得た。

問1 「テレビを見るか音楽を聞くかのどちらかで」の部分が“不是～、就是～”に対応することを理解しているかを問う出題である。高等学校教科担当教員からは高校中国語レベルに即した問いであるとの評価を得た。

問2 「えらく値が張る」という日本語の慣用表現を中国語として相当する文に訳せるかを問う出題で高校中国語レベルに即した問いである。

C 中文和訳の問題で、問題文の中国語はピンインで表記してある。昨年度と同様、高等学校教科担当教員からは「日本語が熟れていて難易度が高かった」との指摘を受けたが、正答率は特に低くはなかった。

問1 “Chàdiǎnr jiù méi mǎidào chēpiào,”の表現が、正確な日本語に訳せるかを問う出題である。この部分は「危うく切符が買えなくなるところだった」に対応するやや高度な表現だが、正答率は高く、高校中国語教育のレベルであることが解答結果から窺い知れる。

問2 “Tā shuōhuà tài zhì,”において話し方が“zhì”という表現が理解できているかを問う出題である。高等学校教科担当教員からは「^{きぬ}歯に衣着せぬ」という日本語の表現が高校生にやや難解ではないかとの指摘があり、出題者としては難解すぎる表現ではないと考えるが、今後の作題に当たっては留意したい。

第4問 平成20年度以来A～Cの3問としている。Aは中国語の短い記事の内容理解を問う問題で、B、Cは会話文の空欄補填問題である。B、Cはコミュニケーションの能力を測ること

を意図した出題で、前年同様どちらも会話文体を採用した。Aは、中国のある市における一週間の気象の変化を取り扱った問題、Bはある市で開催されるサッカーの試合観戦にどのような交通機関を利用して現地に行くかを相談している内容、Cは会話文と地図を読み、出発地と目的地を答える問題である。外部評価委員からは、「問題文がバラエティに富み、楽しく取り組める問題であった」との評価を得た。

A ある市の月曜日から日曜日までの天気、風力、気温の変化から、特定の曜日の気温、天気を文章と表から読み取る出題。高等学校教科担当教員からは、「文章も平易で長文としては取り組みやすい問題である」との評価を得た。

B 友人どうしが、ある市で開催されるサッカーの試合観戦にどのような交通機関で現地に行くかを相談している会話である。34の答えは、問題文を論理的につなげてゆっくり読めば分かる問題である。“打6折”に注を付けたことについて、高等学校教科担当教員から「適切である」との評価を得た。

C 会話文と地図を読み、出発地と目的地を答える問題である。外部評価委員からは「地図を追いながら文章を読んでいく楽しさが感じられる問題である」との評価を得た。

第5問 長文の読解力を試す問題である。貧富の格差が広がる中、貧しくとも心の拠り所を持つ者の心の豊かさを述べた随筆である。高等学校教科担当教員からは、文章の読解は難度が高くなく、分量も適切との評価を得た。併せて高等学校教科担当教員から高校生は「評論文」にやや苦手意識があるとの指摘があった。

問1 空欄補填の語の組合せを問う出題である。正確な文法知識に加えて、文章の論理構造をきちんと把握することが求められる高度な問題だが、正答率は高く、受験者のレベルの高さが知れる。

問2 空欄を動詞で補填する出題である。「各語句の正確なニュアンスを的確に覚えていることが重要であり、良問である」との評価を得た。

問3 下線部の中国語（ピンイン表記）の文の意味を問う出題である。

問4 下線部の中国語の文の意味を問う出題である。

問5 “接着”と入れ替えたとき、文意が最も近くなる語を選択させる問題である。

問6 44にA～Dの四つの文を配列として最も適当なものを入れる問題である。

問7 本文の内容と一致するものを選ぶ問題である。従来は、八つの選択肢から二つを選び出す形式であったが、昨年度から、受験者の過重な負担を避ける意味から、六つの選択肢から二つを選ぶ方式に改めた。

第6問 長文読解問題。人生には忘れてはならないことと忘れた方がよいことがあるという人生哲学を、具体的なエピソードを交えて述べた文章である。高等学校教科担当教員からは、問題が約700字程度で最後の問題としてやや分量が多いとの指摘があった。

問1 (ア)～(エ)に最も適当なものを①～⑤のうちから選ぶ問題である。文法的には「方向補語」や「結果補語」の知識を問う問題であり、特に“出来”“起来”の意味の理解がポイントとなった。

問2 空欄部に充填する文を問う出題である。

問3 下線部の中国語（ピンイン表記）の文の意味を問う出題である。高等学校教科担当教員

からある「ピンイン表記」の分かち書きについてやや違和感があるとの指摘があり、今後の検討課題としたい。

問4 文中の下線部㊦に“不”を入れる箇所を問う問題である。否定副詞“不”と前置詞との位置関係を問う問題である。

問5 文中に使われる副詞“才”と同じ意味のものを選り、ここから文法的理解を深めることを狙った出題。

問6 下線部の中国語の文の意味を問う出題である。

問7 本文の内容と一致するものを選ぶ問題である。従来は八つの選択肢から二つ選り出す形式であったが、第5問同様、昨年度から六つの選択肢から二つを選ぶ方式に改めた。高等学校教科担当教員からは現在の高校生は論述問題を苦手とする者が多く、文学的題材を積極的に採用してほしいとの要望があった。今後の検討課題としたい。

以上、本試験の出題意図と解答結果について、高等学校教科担当教員からの意見や評価も紹介しながら報告した。なお、昨年度の出題の第5問と第6問の内容一致を問う設問で八つから二つ選りする方式から、六つから二つ選りする方式に改めた点、及び長文の字数をおおむね600字程度、1頁に収めた点につき、外部評価委員からは、「問題文が1ページに収まって受験生にとっては見やすく、適切な量となった」との評価を得ている。また、全体として設問形式やその内容に、単語の選りにおいて高校生レベルの出題が多く、出題者の工夫が感じられる良問であったとの評価を得たが、次年度も難易度をあまり上げないようにしてほしいとの要望もあった。これらの意見、要望に配慮しながら、次年度以降も、高等学校における中国語教育の質量とも拡充に寄与するよう、出題の質をより一層高めるよう努力を重ねたいと考える。

3 受験者数、受験者層と試験の難易度、今後の在り方について

平成26年度のセンター試験「中国語」本試験の受験者は449名である。受験者数は過去最多の485名であった6年前から比べると、平成22年度まで減少し続け、平成23年度にやや持ち直して392名となった後、昨年度からようやく受験者数を増加に転じることができた。

過去9年間のセンター試験「中国語」の受験者数と平均点を見渡すと、ここには一つの明白な傾向を見ることができる。それは、平均点が高かった翌年に、受験者数が増加するという強い相関関係があることである。このため、平均点が高く難度の低い出題をすれば受験者増を見込めることになりそうだが、平均点が高く誰にでも解ける問題では、学習到達度の高い受験者も、さほど努力せず学習到達度の高くない受験者もひとしなみに高得点となってしまう、一種の悪平等を来すことになる。学習到達度の高い受験者に相応の高い評価を与え、高くない受験者には相応の結果を与えることができ初めて良質な学力測定と言えるからである。

もう一点、今年度の出題と解答結果から浮かび上がる傾向がある。それは、コミュニケーション運用力としての習熟度は高いものの、語法知識に基づく論理的で正確な理解、及び類義語のニュアンスの把握が弱い点である。特に第5問、第6問は、「会話文」や「読み物」などの長文読解を通じて、語法知識に基づく論理的で正確な理解、及び類義語のニュアンスの把握をよく測定でき、高校生レベルの中国語を学習し、論理的思考の訓練を受けた受験者が十分解ける問題であるが、得点

差がかなり大きい。現在の高等学校における中国語学習とその指導が、コミュニケーション能力にかなりの重点を置いていることも一因と考えられる。高等学校における中国語教育でも、時間の許す限り「読解」の訓練を行うことも必要となろう。

センター試験は、「中国語母語話者」と「高等学校で一から『中国語』を学ぶ学習者」とのレベルの違いにも考慮しつつ高等学校での学習到達度を見るものである。その目的を踏まえつつ、日本における中国語教育全体の改善のためにセンター試験が果たすべき役割を認識し、必要な道筋を明示していく出題の工夫が、今後さらに求められる。その観点から高等学校における中国語教育の現況に基づくことは当然として、さらに論理的理解力を養成するよう中国語教育の方向性を示していくことも、センター試験の責務と考えられる。

今後の問題作成においては、受験者の動向に十分留意しながら、高等学校教科担当教員の意見・評価を尊重し、なおかつ試験の公平性と到達度に応じてきちんと評価できる出題を行うよう、一層努力しなければならないと考える。